慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	日本のドイツ語・ドイツ文学専攻学生のための文献学志向の中高ドイツ語授業のすすめ：ハルトマン『グレゴーリウス』第835行を例に
Sub Title	Eine Anregung zum philologisch orientierten Mittelhochdeutschunterricht für japanische Germanistik-Studierende am Beispiel von Vers 835 aus Hartmanns 'Gregorius'
Author	横山, 由広(Yokoyama, Yoshihiro)
Publisher	慶應義塾大学日吉紀要刊行委員会
Publication year	2012
Jtitle	慶應義塾大学日吉紀要. ドイツ語学・文学 (Hiyoshi-Studien zur Germanistik). No.49 (2012.) ,p.227- 257
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	大谷弘道教授退職記念号 = Sonderheft für Prof. Kodo OTANI
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN10032372-20120330-0227

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

日本のドイツ語・ドイツ文学専攻学生のための文献学志向の中高ドイツ語授業のすすめ ハルトマン『グレゴーリウス』第 835 行を例に*

横　山　由　広

I.

中世ドイツ文芸は今日わが国においても，12 世紀末から 13 世紀初頭にかけて成立した，ドイツ文学の通史でも必ず言及される主要詩人・主要作を中心にその一部が原典から全訳され刊行されている[1)]。良質な翻訳によ

＊ この小論は，註 23 に挙げる 2 編の拙稿の内容を踏まえて執筆されている。なお，この小論を脱稿する間際に，この小論のうち主に ‘Gregorius’ 第 835 行をめぐる論述について，Kurt Gärtner 先生（Trier 大学退職教授）から貴重なコメントをいただいた。当該の論述は後日，稿を改めた上でドイツでも発表する予定である。

1）わが国の中世ドイツ語学・文学研究の新しい包括的な書誌が必要となって久しい。中島悠爾「日本における中世文学研究文献（I）（II）」（日本独文学会『ドイツ文学』第 63 号［1979 年 10 月］，121–135 頁，第 64 号［1980 年 3 月］，156–177 頁）後の，比較的新しい文献情報の公刊として，ここでは次の 2 点を挙げておく：Hirao Kozo, Germanistische Mediävistik in Japan, in: Zeitschrift für Literaturwissenschaft und Linguistik 127 (2002), S. 19–37，松田隆美　伊藤盡「日本語訳で読める，英語以外の中世文学作品」（髙宮利行　松田隆美編『中世イギリス文学入門―研究と文献案内―』雄松堂出版 2008 年，395–398 頁）中の「中高ドイツ語など中世のドイツ語」（同，396–397 頁）。後者より後に刊行された中高ドイツ語文芸作品の

ってその個々の作品世界に，原語である中高ドイツ語の知識がなくとも，あるいはそもそも現代ドイツ語を学ばずとも触れることができるのは，わが国の読書界にとって喜ばしい。他方，中世ドイツの文芸作品を原文で読むための教材・参考書の刊行にも，わが国では一部の出版社が力を注いできた。古いところでは南江堂が叢書 'Altdeutsche Bibliothek' を出していたし[2]，わけても 1980 年前後から 2000 年代初頭にかけて大学書林から，中世ドイツ語のテクストを対象とする一連の対訳・註釈書[3] および文法書など[4] が断続的に刊行された。これらの刊本の過半は中高ドイツ語文芸を

邦訳書には，ウルリヒ・フォン・ツァツィクホーフェン著　平尾浩三邦訳・注釈・論考『湖の騎士ランツェレト』同学社 2010 年，石川栄作訳『ニーベルンゲンの歌　前編・後編』筑摩書房 2011 年（底本はいわゆるＣ本に拠る刊本）がある。

2）相良守峯編著『中高ドイツ語文法』第 9 版 1981 年（初版 1954 年，Altdeutsche Bibliothek 1），桜井和市編注『ニーベルンゲンの歌』第 3 版 1976 年（初版 1953 年，同 2）［テクスト］および『ニーベルンゲンの歌注釈』第 3 版 1976 年（初版 1957 年，同 3）（Ａ本），橋本郁雄編註『憐れなハインリツヒ』1954 年（同 4）［テクストのみ。註釈の出版は確認できなかった］，伊東泰治編著『中世ドイツ抒情詩選』1973 年（同 6）。

3）中高ドイツ語原典のものは註 5 に挙げる。その他には，新保雅浩訳著『古高ドイツ語　オトフリートの福音書』1993 年，藤代幸一監修　石田基広著『中世低地ドイツ語　パリスとヴィエンナ』1993 年，斎藤治之訳著『古高ドイツ語　ノートカー　デア　ドイチェ　メルクリウスとフィロロギアの結婚』1997 年，石川光庸訳・著『古ザクセン語　ヘーリアント（救世主）』2002 年，いずれも大学書林刊。髙橋輝和編訳『古期ドイツ語作品集成』渓水社 2003 年は，「序文」によれば（ⅲ頁）次註に挙げる同著者の文法書に続くもの。

4）古賀允洋著『演習中高ドイツ語文法』1979 年およびその改訂版である同著者の『中高ドイツ語』第 2 版 1995 年（初版 1982 年），浜崎長寿著『中高ドイツ語の分類語彙と変化表』1986 年，藤代幸一　檜枝陽一郎　山口春樹著『中世低地ドイツ語』1987 年，髙橋輝和著『古期ドイツ語文法』1994 年，いずれも大学書林刊。中高独和辞書は，同学社のものが版を重ねている：伊東泰治　馬場勝弥　小栗友一　松浦順子　有川貫太郎編著『新訂・

代表する詩人・作品の対訳・註釈書であり，その中心を占めるのはすでに全編の邦訳書が刊行されていた原典の抜粋版である[5)]。当該の詩人・作品はまた，わが国における中高ドイツ語学習の最も一般的な機会である，ドイツ語学・ドイツ文学専攻の大学院生のための中高ドイツ語への入門を兼ねた原典講読授業において最もよく取り上げられてきたであろう，そしてまたそうあって然るべき詩人であり作品である。では，韻文でものされている原典の趣は畢竟原文にあたることによってしか味わえないのは当然としても，そもそもこれらの原典テクストを訳読することには，どのような教育上の意義があるのだろうか。換言すれば，邦訳書を読み，原文の響きを追うだけでは得難い認識を学習者にもたらす中高ドイツ語テクストの講読授業と対訳・註釈書編集の要諦は何であろうか。以下においてはまず，教育上の要求に応えた中高ドイツ語原典テクストのドイツ語圏における出版形態として，今日では現代ドイツ語との対訳版が主流を占める中，叢書

中高ドイツ語小辞典』2001 年（初版 1991 年）。これに加えて，大学書林から最近（2011 年），古賀允洋編『中高ドイツ語辞典』が刊行された。

5）南江堂の刊本は註 2 に挙げた。大学書林の刊本は次のとおりである：浜崎長寿　松村国隆　大澤慶子編『ニーベルンゲンの歌』1981 年（B 本），古賀允洋著『中世ドイツ英雄叙事詩　クードルーン』1987 年，尾崎盛景　高木実著『ハルトマン・フォン・アウエ　グレゴリウス（ママ）』1990 年，戸澤明訳　佐藤牧夫　佐々木克夫　楠田格　副島博彦著『ハルトマン・フォン・アウエ　哀れなハインリヒ』1985 年，赤井慧爾　斎藤芙美子　武市修　尾野照治訳著『ハルトマン・フォン・アウエ　イーヴァイン』1988 年，須沢通著『ヴォルフラム・フォン・エッシェンバハ　パルツィヴァール』1987 年，佐藤牧夫　佐々木克夫　池田光則　田村久男　丹治道彦著『ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク　リヴァリーンとブランシェフルール』1992 年，ヴェルナー・ホフマン　石井道子　岸谷敏子　柳井尚子訳著『ミンネザング　ドイツ中世恋愛抒情詩撰集』2001 年，山田泰完訳著『ヴァルター・フォン・デア・フォーゲルヴァイデ　愛の歌』1986 年，岸谷敏子　柳井尚子訳著『ワルトブルクの歌合戦　伝説資料とその訳注』1987 年。今日読まれる主要な邦訳書の一覧は，松田　伊藤「中高ドイツ語など中世のドイツ語」，396 頁を参照されたい。

‘Altdeutsche Textbibliothek’（ATB） の Hermann Paul 編 Hartmann von Aue: ‘Gregorius’ の第 15 版が 2004 年に刊行され（2011 年に第 16 版として再版）[6]，註釈付き校訂版の伝統が復活したことを略述する（II）。次いで先の問いを念頭に置きながら，この ATB 版 ‘Gregorius’ 第 15 版において編者 Burghart Wachinger が本文に加えた註解のうち，第 835 行の註で指摘されている解釈をめぐる問題を論じ（III），それを踏まえて有意義な中高ドイツ語テクスト講読のあり方についての私見を最後に記す（IV）。Gottfried von Straßburg をして「彼の水晶のような言葉は常になんと濁りなく澄んでいるのであろう！[7]（wie lûter und wie reine / sîniu cristallînen wortelîn / beidiu sint und iemer müezen sîn![8]）」と言わしめ，同時代の一

6）Hartmann von Aue, Gregorius, herausgegeben von Hermann Paul, neu bearbeitet von Burghart Wachinger, 15., durchgesehene und erweiterte Auflage, Tübingen 2004 (ATB 2); 16., unveränderte Auflage, Berlin / New York 2011. ATB 版 ‘Gregorius’ の次の各旧版も，この小論の執筆にあたって参照した：Die Werke Hartmanns von Aue, IV. Gregorius, herausgegeben von Hermann Paul, Halle 1882; 2. Auflage, Halle a. S. 1900; 3. Auflage, Halle a. S. 1906; 4. Auflage, Halle a. S. 1910; Hartmann von Aue, Gregorius, herausgegeben von Hermann Paul, 5. Auflage, Halle a. S. 1919; 6. Auflage besorgt von Albert Leitzmann, Halle (Saale) 1929; 10. Auflage besorgt von Ludwig Wolff, Tübingen 1963; 11. Auflage besorgt von Ludwig Wolff, Tübingen 1966; 12. Auflage besorgt von Ludwig Wolff, Tübingen 1973; 13., neu bearbeitete Auflage besorgt von Burghart Wachinger, Tübingen 1984; neu bearbeitet von Burghart Wachinger, 14., durchgesehene Auflage, Tübingen 1992.

7）石川敬三訳『ゴットフリート・フォン・シュトラースブルク　トリスタンとイゾルデ』改訂第 4 版　郁文堂 1987 年（底本は Ranke 版），81 頁。

8）以下の II の記述に即して，次の講読用対訳版と註解付きの版を挙げる（原文の引用は前者に拠る）：Gottfried von Straßburg, Tristan, nach dem Text von Friedrich Ranke, neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 3 Bände, Stuttgart, 3., durchgesehene Auflage, 1984 (Band 1) und 1985 (Band 2), 2., durchgesehene Auflage, 1981 (Band 3) (RUB 4471–4473), 第 4628–

流詩人たちの中でも文体の平明さが際立っている印象が強い Hartmann の叙事作品中，さして大部でない ‘Gregorius’ は短編 ‘Der arme Heinrich’ と並んで，入門に格好の作品としての評価が定着していると言えるだろう。このことは，II で言及する複数の講読用テクストの刊行からもうかがえる。わが国でも原典からの全訳として，中島悠爾訳『グレゴーリウス[9)]』（底本は ATB 版 Paul / Wolff 編第 10 版）が出版されている。前述の大学書林版対訳・註釈書の一冊である尾崎盛景・高木実共著『グレゴリウス』（底本は Neumann 編第 3 版）は，大学書林の一連の刊本で中世ドイツ語の原文・日本語訳・註のレイアウトや語註の頻度に統一が図られていない中，抜粋された中高ドイツ語原文（「まえがき」によれば全 4006 行の「およそ 3 分の 1」）を 10 行前後のまとまりに区切って挙げ，そのつどその一節全体の日本語訳を示した後，原文の 1 行ごとに逐語的に適宜文法上の註釈を加えながら日本語の訳語を与えていて[10)]，講読する箇所によっては中島訳と共に，授業の予習に便利な参考書として活用されよう。ただし，この小論で取り上げる第 835 行とその前後は，大学書林版の抜粋テクストには含まれない箇所であり，問題となる語法は，後述するように（註 36）既存の中高独和辞書には言及されていない。

II.

私たちが通常接する中高ドイツ語の原文とは，より正確には詩人による自書が少なくとも後世には伝わらず，写本のみに伝存する文言から復元が

4630 行 ; Gottfried von Straßburg, Tristan, nach der Ausgabe von Reinhold Bechstein, herausgegeben von Peter Ganz, 2 Teile, Wiesbaden 1978 (Deutsche Klassiker des Mittelalters, neue Folge 4), 第 4626–4628 行。

9）平尾浩三　中島悠爾　相良守峯　リンケ珠子訳『ハルトマン・フォン・アウエ　ハルトマン作品集』郁文堂 1982 年，161–234 頁。

10）原文の引用がない箇所は日本語で「梗概」が記されるのみである。巻末に簡略な「解説にかえて」「参考文献」一覧および「語彙索引」が付されている。

試みられたものであり，その意味では総じて，19 世紀に確立された中世ドイツ文献学の成果であると言うことができる。中でも Franz Pfeiffer が創始した校訂版の叢書 ‘Deutsche Classiker（後に Klassiker）des Mittelalters’ の各巻は，Leipzig の F. A. Brockhaus 社を版元に 1864 年から順次刊行され版を重ねた[11]。副題の ‘Mit Wort- und Sacherklärungen’ が示すとおり，中高ドイツ語本文の理解に資する主として個々の語句についての註釈が，本文と同じ頁の下部に与えられているのがこの叢書の特徴である。もっとも註釈は「言語的・内容的に難解な箇所についての説明[12]」であって，もとよりテクストの全語句に付されているのではない。‘Deutsche Klassiker des Mittelalters’ は，旧西ドイツで Wiesbaden を新たな所在地とした F. A. Brockhaus 社が 1954 年に刊行を開始した ‘Neue Folge’ を含めても，すでにシリーズとしては途絶えてしまっているようである。それにひきかえ今日では，‘Bibliothek deutscher Klassiker’ の中の ‘Bibliothek des Mittelalters’, ‘de Gruyter Texte’, ‘Reclam Universal-Bibliothek’（RUB）など複数の叢書から，少なくない数の中高ドイツ語と現代ドイツ語との対訳版が出版されており，それらの多くにおいて現代ドイツ語の訳文は，第一義的には中高ドイツ語原文の理解を助けるための補助手段として位置づけられているようである。たとえば新しい RUB 版 ‘Gregorius’[13]

11）この叢書については筆者の手許にあるオリジナルの他に，Eine Wissenschaft etabliert sich: 1810–1870, mit einer Einführung herausgegeben von Johannes Janota, Tübingen 1980 (Deutsche Texte 53, Texte zur Wissenschaftsgeschichte der Germanistik 3), Einleitung の，ゲルマニスティクの歴史において Pfeiffer が果たした役割を説明した一節（S. 42–46）の中の，叢書第 1 巻 ‘Walther von der Vogelweide’ に即した記述（S. 44）を参照した。

12）Janota, S. 44.

13）Hartmann von Aue, Gregorius, Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch, nach dem Text von Friedrich Neumann, neu herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Waltraud Fritsch-Rößler, Stuttgart 2011 (RUB 18764). ‘Gregorius’ は RUB からかつて次の 2 種の版が刊行された：Hartmann von

の編訳者 Waltraud Fritsch-Rößler は，「教歴が 20 年を超えて，［…］対訳によって中高ドイツ語原文の構文が見分けられ，あとづけられるようになることが，洗練された訳文を示すことよりも重要であると考えている。したがって，ouch でも nû でも訳さない語はない，それどころか逆にときどきは訳文で 1 語増しに［…］することを第一の原則とした。［…］[14]。」Pfeiffer が掲げた，文献学の所産である中高ドイツ語原文を専門家でない一般の読者に向けて開かれた形で提供するという構想は[15]，今日では主として現代ドイツ語との対訳版によってその実現が図られていると言ってよいだろう[16]。しかし ‘Deutsche Klassiker des Mittelalters’ で採られた方式が今なおその教育面での有用性を評価されていることは，とりわけ前記

Aue, Gregorius, der gute Sünder, Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch, Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Friedrich Neumann, Übertragung von Burkhard Kippenberg, Nachwort von Hugo Kuhn, Stuttgart 1983 (RUB 1787), 親本は Hartmann von Aue, Gregorius, der gute sünder, mittelhochdeutscher text nach der ausgabe von Friedrich Neumann, übersetzung von Burkhard Kippenberg, nachwort von Hugo Kuhn: «der gute sünder – der erwählte?», Ebenhausen bei München 1959; Gregorius oder der gute Sünder, eine Erzählung von Hartmann von Aue, aus dem Mittelhochdeutschen übersetzt von Karl Pannier, Leipzig [mit ‘Vorbemerkungen’ „im Mai 1883“] (RUB 1787). Fritsch-Rößler 編・対訳版と Kippenberg 対訳版の中高ドイツ語テクストは，1958 年の Neumann 編初版に拠る。Pannier 訳の底本は ATB 版 Paul 編初版である。なお RUB 版 Kippenberg 対訳版の初版は，Fritsch-Rößler 編・対訳版，S. 241 によれば 1963 年に刊行されている。

14）Fritsch-Rößler 編・対訳版，S. 243f.

15）詳しくは Janota, S. 42–46 を参照されたい。

16）現代ドイツ語訳ないし新高ドイツ語訳がいつ頃から中高ドイツ語原典テクストとの対訳という形態で刊行されるようになったのかを筆者は精査していないが，その普及のはしりは，1959 / 1963 年刊の Kippenberg 対訳版 ‘Gregorius’ あたりではなかったかという印象を持っている。同じ RUB 版 ‘Gregorius’ でも 1883 年の刊本は，中高ドイツ語原文を模して脚韻を踏んだ新高ドイツ語訳文のみである。Janota, S. 41f. を参照されたい。

ATB 版 Paul / Wachinger 編 ‘Gregorius’ 第 15 版に明らかである。中世ドイツ文芸作品の校訂版の代表的な叢書として長い伝統を有する ATB からはすでに 2000 年に，Karl Bartsch の版を Karl Stackmann が新訂した ‘Deutsche Klassiker des Mittelalters’ の一巻であった ‘Kudrun’ が，Stackmann が序論を改め訂正一覧を付した上で復刊されている[17]。そして ATB 版 ‘Gregorius’ は第 15 版で中高ドイツ語原文にこれを理解するための註解がはじめて付され，Apparat は 1984 年刊の Paul / Wachinger 編第 13 版から本文頁下部に設けられてきた異文の部との上下 2 部構成になった。前記 ‘Kudrun’ を当時 ATB のシリーズ全体の編者としてそのラインアップに加える提案をした Wachinger は[18]，第 13 版から自ら編集を手がけてきた Paul 編 ‘Gregorius’ の第 15 版の序文において，対訳版の叢書ではない ATB の，現今の大学授業にも対応した新しいあり方を模索する中で ‘Deutsche Klassiker des Mittelalters’ の方式を参考にして註解を導入した旨を述べている[19]。

Wachinger が同所で言及しているとおり[20]，‘Gregorius’ は ‘Deutsche Klassiker des Mittelalters’ において 2 人の編者が手がけた作品であり，そ

17）Kudrun, nach der Ausgabe von Karl Bartsch, herausgegeben von Karl Stackmann, Tübingen 2000 (ATB 115). 復刊の経緯については同書，S. VIII を参照した。

18）Stackmann 編 ‘Kudrun’, S. VIII に拠る。

19）Paul / Wachinger 編第 15 版，S. V. ただし同所では，„Deutsche Klassiker des Mittelalters“ は „Klassiker des deutschen Mittelalters“ と表記されている。なお，本文頁下部の Apparat を異文と註解の上下 2 部で構成する方針は，今後の ATB の刊本において踏襲される可能性がある。次の論文を参照されたい：Kurt Gärtner, Die Editionen der ‘Klage’ Hartmanns von Aue, in: »Texte zum Sprechen bringen«: Philologie und Interpretation, Festschrift für Paul Sappler, herausgegeben von Christiane Ackermann und Ulrich Barton unter Mitarbeit von Anne Auditor und Susanne Borgards, Tübingen 2009, S. 273–292, hier S. 286 und 291f.

20）Paul / Wachinger 編第 15 版，S. V.

れもこの叢書で当初 Fedor Bech によって 3 巻に編まれた Hartmann の全作品のうち[21]，後に ‘Neue Folge’ において再び刊行されたのは，編者が Friedrich Neumann に代わった ‘Gregorius’ のみであった[22]。筆者はかねて中高ドイツ語初学者にとっての ‘Deutsche Klassiker des Mittelalters’ 各巻の註解の有用性を指摘すると共に，今日それらが絶版になっていることを惜しんだが[23]，‘Gregorius’ は同叢書の 2 種を含め 3 種類もの註解付き校訂版が刊行された上に，最新のものは今日新刊で容易に入手できる点でも，講読の対象に選びやすい作品であると言えるだろう。また ‘Gregorius’ は，現代ドイツ語訳も複数の対訳書を比較して参照できる[24]。今日最も広く普及しているのは，Fritsch-Rößler 訳の前の，Burkhard Kippenberg の訳を収めた RUB 版であろう。‘Bibliothek deutscher Klassiker’ から 2004 年に刊行された Hartmann 作品集には，‘Gregorius’ は ‘Der arme Heinrich’ および ‘Iwein’ と共に Volker Mertens 編訳で収録されている[25]。

21）Hartmann von Aue, herausgegeben von Fedor Bech, 1. Theil: Êrec der Wunderære, 1867, ^{2}1870, ^{3}1893; 2. Theil: Lieder, Erstes Büchlein, Zweites Büchlein, Grêgorjus, Der arme Heinrich [3. Auflage: Lieder, Die Klage, Büchlein, Grêgorjus, Der arme Heinrich], 1867, ^{2}1873, ^{3}1891; 3. Theil: Iwein [seit der 2. Auflage: Iwein, oder der Ritter mit dem Löwen], 1869, ^{2}1873, ^{3}1888, ^{4}1902, Leipzig (Deutsche Classiker des Mittelalters 4–6).

22）Hartmann von Aue, Gregorius, Der „gute Sünder“, herausgegeben und erläutert von Friedrich Neumann, Wiesbaden 1958; 2. durchgesehene Auflage, Wiesbaden 1965; 3. durchgesehene Auflage, Wiesbaden 1968; 4. Auflage, Wiesbaden 1972; 5. Auflage besorgt von Christoph Cormeau, Wiesbaden 1981 (Deutsche Klassiker des Mittelalters, neue Folge 2).

23）横山由広「中高ドイツ語で学びはじめるドイツ語の歴史」（慶應義塾大学通信教育補助教材『三色旗』第 704 号［2006 年 11 月］，14–19 頁）中の 17 頁および横山由広「中高ドイツ語」（高宮　松田編『中世イギリス文学入門―研究と文献案内―』，391–393 頁）中の 391 頁。

24）対訳以外の現代ドイツ語訳や英訳にはここでは言及しない。

25）Hartmann von Aue, Erec, herausgegeben von Manfred Günter Scholz, übersetzt von Susanne Held, Frankfurt a. M. 2004 (Bibliothek des

III.

‘Gregorius’ では物語本編の冒頭で，両親の死後に道ならぬ関係に陥った王子王女兄妹の子である主人公の，出生をめぐるいきさつが語られる[26]。第 835 行は，妹王女の懐妊に直面した兄妹が老臣の助言を求め，その説くところに従って兄王子が贖罪のために聖地を目指すものの[27] 程なく命を落とすくだりの中の一行である。以下にまず第 825–857 行の原文と Paul / Wachinger 編第 15 版の第 835 行註釈，さらにこれを継承したことが見て取れる[28] Fritsch-Rößler 編・対訳版 269 頁の同行註釈を引用する。

825 unmanic tac ende nam
unz ir bœse mære kam

Mittelalters 5); Hartmann von Aue, Gregorius, Der arme Heinrich, Iwein, herausgegeben und übersetzt von Volker Mertens, Frankfurt a. M. 2004 (Bibliothek des Mittelalters 6).

26）以下で ‘Gregorius’ の原文引用は，特に断っていなければ Paul / Wachinger 編第 15 版に拠る。中島訳は第 184 行 einen sun und ein tohterlîn を「王子，王女のふた児である」，そしてこの「ふた児（参考：第 187–188 行 dô diu kint wâren / komen ze zehen jâren, 中島訳「やがて月日が流れ過ぎ，この子らが十の齢（よわい）を数えた時」）」が「兄妹」であるとしており，ここでの日本語による呼称は中島訳に従った。

27）参考：第 571–582 行 ir sult iuch wider si enbarn / daz ir zehant wellet varn / durch got ze dem heiligen grabe. / [...] / dâ büezet iuwer sünde / als iuch des got geschünde. / der lîp hât wider in getân: / den lât im ouch ze buoze stân, 中島訳「そしてお伝えになるのです。神のため，あなた様が今直ちに聖地に巡礼なさるのだと。［…］そして殿はかの聖地で，主なる神のみ旨のまま，あなたの罪を贖（あがな）うのです。あなたの肉が神に逆らい，恐ろしい罪を犯したのです。ですからその肉をもって，神に贖罪せねばならぬのです。」

28）Fritsch-Rößler 編・対訳版，S. 244: „Wachingers zweiten Apparat (in der 15. Aufl., 2004) mit Verständnishilfen habe auch ich dankbar konsultiert.“

und der grœzist ungemach
der ir zir lebene ie geschach,
daz ir bruoder wære tôt.
der tôt kam im von seneder nôt.
Dô si von ir bruoder schiet,
als in der wîse beiden riet,
nu begunde er siechen zehant
(des twanc in der minne bant)
und muose belîben sîner vart
der er durch got enein wart.
sîn jâmer wart sô vester
nâch sîner lieben swester
daz er ze deheiner stunde
sich getrœsten kunde.
alsus dorrete im der lîp.
swie si doch jehen daz diu wîp
sêrer minnen dan die man,
des enist niht, daz schein dar an:
wande sîn herzeleit
daz im was vür gespreit,
daz was dâ wider kleine,
niuwan diu minne eine
diu im ein zil des tôdes was:
der hete si vieriu und genas.
sus ergreif in diu senede nôt
und lac vor herzeriuwe tôt.
Diz mære wart ir kunt getân,
dô si ze kirchen solde gân,

855 rehte dâ vor drîer tage.
nû vuor si hin mit grôzer klage
und begruop ir bruoder und ir man.

Paul / Wachinger 編第 15 版の第 835 行註：

„**35** belîben *unklar: m. Dat. 'beharren auf, festhalten an' oder m. Gen. 'dableiben von'? Nach 857 war der Bruder jedenfalls noch nahe genug für eine Bestattung, nach der afrz. Vie A 677 starb er einen Tag nach der Trennung.*“

Fritsch-Rößler 編・対訳版の第 835 行註：

„835 Es bleibt unklar, wie weit der Bruder kam, daher auch *belîben* mit Genitiv/Dativ unklar; vermutlich starb er noch auf der Hinreise nach Jerusalem (*zehant*), jedenfalls wird er überführt und beerdigt, ohne dass seine Schwester eine nennenswert weite Reise unternehmen muss, d. h. in seiner Heimat.“

ここでは動詞 belîben 'bleiben' が女性名詞 vart 'Fahrt' の与格とも属格とも結ぶ可能性が認められており，そのうち vart を与格と見做す解釈は，次の Neumann の同行註釈を受け継いだものであると言えそうである[29]：

„835 *belîben* stv. mit Dat., verharren bei etwas. Undeutlich, wie weit der Bruder kommt. Die Bestattung erfolgt in der Heimat (V. 857).“

他方，前記の各対訳版における第 835 行の訳文に目を向けると[30]，

29）この註釈も第 835 行の本文 und muose belîben sîner vart も，Neumann 編初版の文言が第 5 版まで変更なしに受け継がれている。

30）以下の訳文の引用はいずれも第 831–836 行に対応する箇所で，第 835 行

Kippenberg: „Als sie sich damals von ihm getrennt, / wie ihnen beiden der Weise geraten, / war er plötzlich erkrankt, / von den Banden der Liebe bezwungen, / und mußte die Fahrt unterbrechen, / die er Gott zuliebe begonnen hatte."

に対して

Mertens: „Nachdem sie Abschied von ihrem Bruder genommen, / wie der Weise ihnen geraten hatte, / wurde er sogleich krank, / denn die Fesseln der Liebe drückten ihn, / und er mußte schließlich auf der Reise sterben, / die er Gott zu Gefallen unternommen hatte."

Fritsch-Rößler: „Nachdem sie sich von ihrem Bruder getrennt hatte, / wie der erfahrene Vasall ihnen geraten hatte, / wurde er nämlich sehr schnell krank / (weil die Fessel der Liebe ihm das Herz abschnürte) / und starb auf seiner Pilgerfahrt, / zu der er sich Gott zu Gefallen entschlossen hatte."

となっており，'Gregorius' を新しい対訳版で講読するかぎりでは，後述する辞書の記述も手伝って，読者は第 835 行の belîben を 'sterben' と同定することになるのではないだろうか。なお，中島訳ではこの箇所は Kippenberg 訳と同様に，

「かの老賢者が彼ら二人に勧めた通り，兄君は聖地へと向かったが，（二人をつなぐ愛の絆はあまりにも固く，）ほどなく彼は病む身となり，神のみ心を求めんとて出で立ったこの旅を，中断せねばならなかっ

に相当する部分には筆者が下線を施した。

た。」

となっている[31]。

用例記載のない 1 巻本の小型中高ドイツ語辞典[32] である Matthias Lexer: ‘Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch’[33] と Beate Hennig: ‘Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch’[34] の動詞 belîben の項（‘Mhd. Taschenwörterbuch’, S. 13c–14a; ‘Kleines Mhd. Wörterbuch’, S. 25c）[35] には，語

31）Pannier 訳では第 835 行およびこれと韻を踏む第 836 行は „Drum unterließ er seine Fahrt, / Um die mit Gott er einig ward.“

32）この種の中高ドイツ語辞書をめぐる問題については，次の論考を参照されたい：Ralf Plate, Votum für ein kleines Belegwörterbuch zur mittelhochdeutschen Klassik, zugleich ein Beitrag zur Kritik der beiden großen mittelhochdeutschen Wörterbücher und des „Taschenlexer“, in: ドイツ文法理論研究会『エネルゲイア』第 23 号（1997 年），57–97 頁（2012 年 1 月 22 日現在 http://www.perspicuitas.uni-essen.de/aufsatz/plate.pdf でも閲覧可能）および Ralf Plate, „Erster schneller Zugriff“ oder Fehlgriff? Zum alten und zu einem neuen mittelhochdeutschen Wörterbuch für Studierende, anläßlich des Erscheinens von: Beate Hennig, Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch, in Zusammenarbeit mit Christa Hepfer und unter redaktioneller Mitwirkung von Wolfgang Bachofer, Tübingen: Niemeyer 1993, XXV, 340 S. - 2., ergänzend bearbeitete Auflage, Tübingen: Niemeyer 1995, XXV, 396 S. - 3., ergänzend bearbeitete Auflage, Tübingen: Niemeyer 1998, XXV, 496 S. (+ zwei Seiten „Raum für Notizen“, unpaginiert), in: Zeitschrift für Dialektologie und Linguistik 67 (2000), S. 168–187.

33）Matthias Lexer, Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch, mit den Nachträgen von Ulrich Pretzel, 38., unveränderte Auflage, Stuttgart 1992.

34）Beate Hennig, Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch, in Zusammenarbeit mit Christa Hepfer und unter redaktioneller Mitwirkung von Wolfgang Bachofer, 5., durchgesehene Auflage, Tübingen 2007.

35）見出しは „**be-lîben, blîben** stv.“ (‘Mhd. Taschenwörterbuch’) と „**be-lîben, we-lîben, blîben, plîben** stV [1a]“ (‘Kleines Mhd. Wörterbuch’) である。

釈の中に „tot bleiben“（‘Mhd. Taschenwörterbuch’, S. 13c）や „umkommen, vergehen, zunichte werden“（‘Kleines Mhd. Wörterbuch’）も認められる[36]。さらには „G verzichten auf; sterben durch“（‘Kleines Mhd. Wörterbuch’; „G“ = „Genitiv-Objekt“）から，中高ドイツ語 belîben には「死ぬ」の意で死因を表す属格目的語と共に用いられる事例があることが読み取られるものの[37]，それはおそらく問題の ‘Gregorius’ 第 835 行とは別の用例であることは後述する。この解釈を ‘Gregorius’ 第 835 行に適用して，兄王子の死の原因としてその旅が属格で言及されている（sîner vart）と考えるのは，前後で彼の死が別れた妹王女への思慕の念に起因するものであったことが重ねて述べられていることからも，いささか無理があろう。事実 Mertens 訳と Fritsch-Rößler 訳は belîben に ‘sterben’ の意を認めているようであっても，sîner vart をその原因とはとらえていない。これに

36）伊東他編著『新訂・中高ドイツ語小辞典』は，各見出し語の意味項目ごとに用例を（出典は記さず）引用し，これに日本語訳を付すが，Neumann 編第 3 版を含む ‘Gregorius’ 諸版を「引用文献」（764–768 頁）に挙げている（765）ものの，belîben の項（45f., 見出しは „**belîben, blîben**“）の用例のうち与格と結んでいるのは「doch beleip der bezzer teil Gahmurete それでもはるかに立派な部分がガハムレトの手に残った」（45）1 例のみであり（これの出典は，後記する BMZ，belîben の項の 1e にすでに引用されている [Band 1, S. 968b50–969a2] Wolfram von Eschenbach: ‘Parzival’ 51,30 である），属格補足語をとるものはない。古賀編『中高ドイツ語辞典』でも，‘Gregorius’ は「見出し語と用例を収集した文献」に含まれ（v–vi 頁，2），「注釈書，語彙辞典，対訳書」として Neumann 編第 3 版も挙げられているが（vii–ix，13），その belîben の項（47 頁 , 見出しは „**be-lîben, blîben**“）では，用例は意味項目のそれぞれには示されず（原文の引用は ‘Der arme Heinrich’ 第 510–511 行のみ），補足語の情報も与えられていない。

37）‘Kleines Mhd. Wörterbuch’, S. XXIV によれば，同辞書ではセミコロンに次の 2 種の機能が割り当てられている：„Bei Sinngrenzen zwischen Bedeutungsangaben.“ „Bei unterschiedlichen grammatischen Konstruktionen.“ ここは前者のみのケースで，„G“ は „sterben durch“ にも該当すると解するべきだろう。

対し ‘Kleines Mhd. Wörterbuch’ の，belîben が「放棄する」を意味し放棄の対象は属格で表されるという記述の方は，他ならぬ ‘Gregorius’ 第 835 行に基づいている可能性が高い。Ulrich Pretzel が ‘Mhd. Taschenwörterbuch’ に付した ‘Nachträge’ の動詞 belîben の項（‘Mhd. Taschenwörterbuch’, S. 371b）[38] には，„sîner vart b. *seine fahrt aufgeben*“ とあり，belîben の目的語を sîner vart に限った（ただしその格は明示していない）この記述が ‘Gregorius’ の当該の用例に関わるものであることは，同著者による ‘Mittelhochdeutsche Bedeutungskunde’[39] の belîben の項（S. 164）[40] に特に記されたその解釈からもまず間違いないと思われる：

> „*(er) muose belîben sîner vart* (Gen. separativus oder ablativus) er muß seine Fahrt aufgeben Greg. 835“[41]

以上見てきたように ‘Gregorius’ の読者は，第 835 行の belîben sîner vart について複数の解釈に出会うわけだが，講読においてはこの曖昧さをやりすごしてしまう前に，中高ドイツ語の標準的な辞書と文法書，すなわち BMZ として知られる全 4 巻の ‘Mittelhochdeutsches Wörterbuch’[42] と BMZ の補遺と索引でもある全 3 巻の Lexer: ‘Mittelhochdeutsches Hand-

---

38）見出しは „**belîben** *stv.*“ である。

39）Ulrich Pretzel, Mittelhochdeutsche Bedeutungskunde, unter Mithilfe von Rena Leppin, Heidelberg 1982.

40）見出しは „***belîben*** (außer der üblichen Bedeutung)“ である。

41）„muß“ は正しくは „mußte“ であろう。

42）Mittelhochdeutsches Wörterbuch, mit Benutzung des Nachlasses von Georg Friedrich Benecke ausgearbeitet von Wilhelm Müller und Friedrich Zarncke, Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854–1866 mit einem Vorwort und einem zusammengefaßten Quellenverzeichnis von Eberhard Nellmann sowie einem Alphabetischen Index von Erwin Koller, Werner Wegstein und Norbert Richard Wolf, Stuttgart 1990.

wörterbuch'[43]，さらには全4巻の予定で現在刊行中の'Mittelhochdeutsches Wörterbuch'（MWB）[44] および Paul: 'Mittelhochdeutsche Grammatik'[45] には当たってみるべきであろう。

'Mhd. Handwörterbuch' の動詞 belîben の項（Band 1, Sp. 172f.）[46] には，用例が示されることなしに „*im gleichen zustand bleiben, verharren mit dat. od. präpos.*" とあり，先に引用した Neumann の註釈の „*belîben* stv. mit Dat., verharren bei etwas" は，Lexer のこの簡潔な記述に依拠したものかもしれない。そこで当該の語法をより詳しく知るために BMZ を繙き，やはり動詞 belîben の項（Band 1, S. 968a45–969b13）[47] を見ると，その先頭を占める項

43）Matthias Lexer, Mittelhochdeutsches Handwörterbuch, zugleich als Supplement und alphabetischer Index zum Mittelhochdeutschen Wörterbuche von Benecke-Müller-Zarncke, Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1872–1878 mit einer Einleitung von Kurt Gärtner, Stuttgart 1992.

44）Mittelhochdeutsches Wörterbuch, im Auftrag der Akademie der Wissenschaften und der Literatur Mainz und der Akademie der Wissenschaften zu Göttingen herausgegeben von Kurt Gärtner, Klaus Grubmüller und Karl Stackmann, Stuttgart 2006ff. 2012 年 1 月現在，第 1 巻第 5・第 6 分冊合冊まで刊行済み（a - ëbentiure）。MWB の最新情報はサイト http://www.uni-trier.de/index.php?id=6910&L=0&no_cache=1&sword_list[0]=mwb を参照されたい（最終閲覧日 2012 年 1 月 30 日）。

45）Hermann Paul, Mittelhochdeutsche Grammatik, 25. Auflage, neu bearbeitet von Thomas Klein, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera, mit einer Syntax von Ingeborg Schröbler, neubearbeitet und erweitert von Heinz-Peter Prell, Tübingen 2007 (Sammlung kurzer Grammatiken germanischer Dialekte A2).

46）見出しは „be-lîben, blîben *stv. II.*" である。なお 'Mhd. Handwörterbuch' では，不定詞が中性名詞化された „be-lîben *stn.*" を別見出しにしている（Band 1, Sp. 173; Band 3, 'Nachträge', Sp. 58 でも同様に „belîben." と „belîben *stn.*" は分けられている）。

47）見出しは „belîbe, blîbe *stv. bleibe.*" である。

„1. *verharre an demselben orte, sei er nah oder fern, oder in demselben zustande.*“ (968a45–47)

は,

„a. *ohne zusatz.*“ (968a48)

„b[.] *mit adverbien.*“ (968b4)

„c. *mit präpos.*“ (968b14)

„d. *mit prädicativer bestimmung.*“ (968b35f.)

„e. *mit dativ der person.*“ (968b48f.)

„f. *mit adverbialpräpos.*“ (969a8)

の各見出しで始まる 6 項目に区分けされており，そのかぎりにおいては belîben と共に用いられる与格は「人」であって，「事物」ではないのである。なお，BMZ のこの項の構成は見出しごとに以下,

„2. *bleibe todt, verliere das leben.*“ (969a13f.)

„3. *bleibe zurück, werde unterlassen, unterbleibe.*“ (969a18f.)

„4. belîben lân *einen oder etwas da lassen wo es ist, sich nicht darum bekümmern.*“ (969a38–40)

„a. *mit accus. der person.*“ (969a40f.)

„b. *mit accus. der sache.*“ (969a48f.)

と続く。

MWB の動詞 belîben の項（Band 1, Sp. 560, Z. 48 – Sp. 562, Z. 15）[48] は自動詞の項と他動詞の項に大別され，後者については後述するが，前者

48）見出しは „**belîben** *stV. (Ia)*“ である。

では大見出し

„**1** *intr.* ‘*bleiben, verharren*’“ (560, 48)

のもとに小見出し

„**1.1** *ohne Ergänzung:*“ (560, 49)

„**1.2** *Part.-Adj.* ‘*bleibend, dauernd*’“ (560, 64)

„**1.3** *als Überleitung im Erzählvorgang* ‘*ein Thema ruhen lassen, beenden*’ *(z. T. mit Ergänzung, vgl. auch* 1.7.2*):*“ (561, 6–8)

„**1.4** *mit Ergänzung zur Angabe eines Ortes oder bestimmten Zustands:*“ (561, 12–14)

„**1.5** ‘*sterben, auf dem Kampfplatz bleiben*’ *(oft* tot［sic］*~):*“ (561, 28f.)

„**1.6** ‘*jmdm. (übrig-)bleiben, jmdm. gehören*’ *(überw. mit Dat. d. P.):*“ (561, 38–40)

„**1.7** *in der Wendung* ~ lâʒen“ (561, 48f.)

„**1.7.1** ‘*jmdn. / etw. zurücklassen*’“ (561, 49f.)

„**1.7.2** ‘*etw. unterlassen, beenden*’“ (561, 57)

が挙げられており，唯一 belîben と与格との結びつきが明記された 1.6（BMZ の 1e に対応[49]）は，当該の与格が「人」への帰属関係を表すとい

49）BMZ の 1e の用例のうち „im beleip daʒ leben *Iw.* 50. mir belîbe der lîp niht *das.* 15“ (Band 1, S. 968b49f.) の後者すなわち ‘Iwein’ 第 176 行（後記参照）と „ir landes ist ir niht beliben *Wigal.* 3630“ (969a2f.) すなわち Wirnt von Grafenberg: ‘Wigalois’ 第 3630 行は，MWB の 1.6 にも挙げられている（それぞれ Band 1, Sp. 561, Z. 41–43 と 44）。BMZ と ‘Mhd. Handwörterbuch’ に記載されている用例の出典は次の索引で確かめられる：Eberhard Nellmann, Quellenverzeichnis zu den mittelhochdeutschen Wörterbüchern, ein kommentiertes Register zum ‘Benecke / Müller / Zarncke’ und zum

う語法である。問題の belîben sîner vart が該当しそうなのはむしろ 1.4 と 1.5 であるが，両項に原文ごと引用されている用例のうち belîben が与格を伴うのは 1.5 の 2 例のみで，その与格はいずれも「人」を表している[50)]。また，1.4 と 1.5 に引用されている原文で，belîben の属格補足語を示すものは見当たらない。そもそも ‘Mhd. Grammatik’（S. 348, § S 90）に

> „Der Dat. bezeichnet vorzugsweise Personen oder lebende Wesen, denen ein verbales Geschehen zugewendet ist.“

と要約されているように，‘Gregorius’ 第 835 行の sîner vart を与格とする解釈には，どうしても不自然さが否めないであろう。属格の用法については ‘Mhd. Grammatik’（S. 343, § S 76）に

> „Seltener wird der Gen. eines Subst. mit räumlicher Bedeutung zur Adverbialergänzung des Ortes:“

という指摘が見えるものの，当該の語法が „Verben der Bewegung“ と関連していることが付記され，用例もその種の動詞に伴うもののみが挙げられている。問題の sîner vart が属格であるとしても belîben と結びついている以上，„auf der Reise“（Mertens）や „auf seiner Pilgerfahrt“（Fritsch-

---

‘Lexer’, Stuttgart / Leipzig 1997. ‘Iwein’ の用例は BMZ では Benecke / Lachmann 編初版（Iwein, der Riter mit dem Lewen getihtet von dem Hern Hartman Dienstman ze Ouwe, heraus gegeben von G. F. Benecke und K. Lachmann, Berlin 1827）の頁で示され（BMZ, Band 1, S. XVIII と S. 18* および ‘Quellenverzeichnis zu den mhd. Wörterbüchern’, S. 82），同版の 50 頁と 15 頁にはそれぞれ，第 1110–1136 行ないし第 157–186 行が記載されており，うち belîben の用例は第 1110 行と第 176 行である。

50）„waz ime dâ helede tôt peleib VALEX 702“ (561, 29f.); „wære im niht wan Vîvîanz / ûf dem velde Alischanz / beliben WH 53,13“ (561, 35–37).

Rößler）の意味で用いられたとは言い難いのではないか。もっともbelîben が ‘sterben’ の意で属格と共に用いられる例として，BMZ の当該項 2 に Hartmann: ‘Erec’ 第 854 行が引用されている（Band 1, S. 969a16–18）[51]：

853 si wânde er wære erslagen
und er belibe des slages dâ.

BMZ の解釈に従えば属格 des slages が死因を示すと解されるこの用例は[52]，先に紹介した belîben の一用法の辞書記述 „G verzichten auf;

51）以下の ‘Erec’ の引用は次の校訂版から：Hartmann von Aue, Erec, mit einem Abdruck der neuen Wolfenbütteler und Zwettler Erec-Fragmente, herausgegeben von Albert Leitzmann, fortgeführt von Ludwig Wolff, 7. Auflage besorgt von Kurt Gärtner, Tübingen 2006 (ATB 39). 行数の表記も同校訂版に拠る。

52）‘Deutsche Classiker des Mittelalters’ 版 ‘Erec’ 第 1–3 版の当該行の註は „und wäre von dem Schlage liegen geblieben, gestorben.“ 同第 3 版の ‘Wortregister’（S. 330–353）には „belîben, blîben *stv. c. gen.* 853. [...]“（S. 331）と記され，問題の用例が belîben と属格との結びつきで注目されたことがうかがえる。同用例は Jacob Grimm / Wilhelm Grimm: ‘Deutsches Wörterbuch’ (Der Digitale Grimm: Elektronische Ausgabe der Erstbearbeitung von Jacob Grimm und Wilhelm Grimm, bearbeitet von Hans-Werner Bartz, Thomas Burch, Ruth Christmann, Kurt Gärtner, Vera Hildenbrandt, Thomas Schares und Klaudia Wegge, herausgegeben vom Kompetenzzentrum für elektronische Erschließungs- und Publikationsverfahren in den Geisteswissenschaften an der Universität Trier in Verbindung mit der Berlin-Brandenburgischen Akademie der Wissenschaften, Frankfurt am Main 2004) の BLEIBEN 第 8 項（„*die ältere sprache fügte auch den gen. zu* bleiben“）にも挙げられている。なお，今日普及している ‘Erec’ の現代ドイツ語との対訳版では，第 854 行は „und habe den Schlag nicht überlebt“ (Hartmann von Aue, Erec, mittelhochdeutscher Text und Übertragung von Thomas Cramer, 26.

sterben durch“（‘Kleines Mhd. Wörterbuch’）に通じる。

同じ記述の前半部に対応する箇所を 3 辞書の belîben の項に探すと，まず BMZ 当該項の 3 の末尾に，‘Gregorius’ 第 835 行 belîben sîner vart との関連で無視することのできない次の説明がある（Band 1, S. 969a33–38）：

> „*auffällig ist frauend.* 50, 29, *wo* belîben *mit dem accus. construiert wird:* daȝ ich die vart belîben *(von ihr zurückbleiben, sie unterlassen)* sol. *eine zweite stelle wäre willkommen.*“

ここに引用されている Ulrich von Liechtenstein: ‘Frauendienst’ の用例は[53]，vart が対格であることを別にすれば，問題の ‘Gregorius’ 第 835 行の表現そのままと言ってよいほどである。‘Mhd. Handwörterbuch’ の当該項は，BMZ において待望された類例を補うには至らず，既知の ‘Frauendienst’ の用例の存在に，belîben と結ぶ格の問題には触れずに言及しているのみである（Band 1, Sp. 172f.）[54]：

> „*unterlassen werden, unterbleiben,* bel. lâȝen *unterlassen, wovon abstehen* (*wofür bei* LIEHT. *einmal das einfache* belîben);“

Auflage, Frankfurt a. M. 2005 [1. Auflage 1972, Fischer Taschenbuch 6017]), „und sich von dem Hieb nicht mehr erholen werde“ (Held), „und bliebe von dem Schlag auf dem Kampfplatz“ (Hartmann von Aue, Erec, Mittelhochdeutsch / Neuhochdeutsch, herausgegeben, übersetzt und kommentiert von Volker Mertens, Stuttgart 2008 [RUB 18530]) と訳されている。

53）‘Quellenverzeichnis zu den mhd. Wörterbüchern’, S. 103.

54）以下の ‘Mhd. Handwörterbuch’ からの引用文中の „*bei* LIEHT. *einmal*“ は，先行する BMZ の „*frauend.* 50, 29“ と同定される（‘Quellenverzeichnis zu den mhd. Wörterbüchern’, S. 103）。

しかし，MWB では他動詞としての用法を示す見出し

„**2** *tr.*“ (Band 1, S. 562, Z. 5)
„**2.1** ‘*jmdm. etw. belassen*’“ (562, 5)
„**2.2** ‘*etw. unterlassen*’“ (562, 8)

のうち最後の 2.2 の下に，前記 ‘Frauendienst’ の用例と並んでこれと酷似した Ottokar: ‘Die österreichische Reimchronik’ の複数の用例が引用されている（562, 8–13）：

„der wart des lîbs sô kranc, / daz er ân sînen danc / die reise beleip OTTOK 60123. 15123; die beliben die andern vart *ebd.* 30899; owê des und immer wê / daz ich die vart belîben sol: / daz tuot mir anders denne wol UVLFRD 50,29 *(vgl. Anm. z. St.)*.“

‘Mhd. Handwörterbuch’ の先の引用箇所では，問題の belîben が belîben lâȝen という語法（BMZ の belîben 4 および MWB の belîben 1.7）と関連付けられ，前者と結ぶ対格は後者の対格補足語と同一視されているのかもしれない。また，MWB の引用箇所末尾に参照指示のある，Reinhold Bechstein 編の註釈付き ‘Frauendienst’ 刊本（1888 年）[55] の当該箇所（‘Erstes Büchlein’ 第 201 行）の註釈は

55）Ulrich’s von Liechtenstein Frauendienst, herausgegeben von Reinhold Bechstein, 2 Theile, Leipzig 1888 (Deutsche Dichtungen des Mittelalters 6 und 7). この刊本は http://books.google.co.jp/books?id=CA9bAAAAQAAJ&printsec (1. Theil) および http://books.google.co.jp/books?id=mg5bAAAAQAAJ&pg (2. Theil) の電子版によって閲覧した（最終閲覧日 2012 年 1 月 19 日）。なお，Karl Bartsch 編の叢書 ‘Deutsche Dichtungen des Mittelalters’ は ‘Deutsche Classiker des Mittelalters’ と同じく副題 ‘Mit Wort- und Sacherklärungen’ が付されている。版元も同じ F. A. Brockhaus 社である。

„**201** *die vart belîben,* die Fahrt über, während dieser Reise (abs. acc.) zurückbleiben; vgl. 980,4.“

となっていて，belîben を他動詞とは認めていない[56]。これに対し ‘Die österreichische Reimchronik’ の刊本（1890 年，1893 年）[57] に付されている ‘Glossar’（2. Halbband, S. 1311–1416）の belîben の項（S. 1319b）[58] ではすでに，MWB にも記載された同作の 3 用例が „*transitiv, unterlassen, lassen*“ の見出しの下に挙げられている。ただし，MWB の当該項で唯一原文の引用がない第 15123 行は ob er die reis beliben wære となっていて，sîn による完了形の用例であることが目を引く。なお，異文について一言付け加えておくと，‘Frauendienst’ の写本としては，唯一の完本の他にふたつの断片が発見されているのみで，両断片に伝存しているテクストは当該箇所とは別の部分である[59]。また，Ottokar の 3 用例の

56）この註の末尾で 980,4 を参照するよう指示されているのは，同様に „abs. acc.“ と解される die vart の用例だからであろう：si hât zwei hundert vingerlîn / und dannoch eins und sibenzic mêr / die vart hin gegeben: [...] (Bechstein 編 ‘Frauendienst’ 980,2ff.). なお Bechstein の ‘Frauendienst’ 980,7 (980,7f. daz ich die vart gesach, daz nie / sî dâ von geneigt sich ie.) の次の註釈も参照されたい：„*daz* (das erste) muß hier correlativ stehen = *swaz*, wenn etwas, was immer auch (ich die Fahrt über gesehen habe).“

57）Ottokars österreichische Reimchronik, nach den Abschriften Franz Lichtensteins herausgegeben von Joseph Seemüller, 2 Halbbände, Hannover 1890 und 1893, Nachdruck Dublin / Zürich 1974 (MGH Deutsche Chroniken und andere Geschichtsbücher des Mittelalters 5). 1890 / 1893 年刊のオリジナルは http://books.google.pt/books/about/Ottokars_%C3%B6sterreichische_Reimchronik.html?id=-bsUAAAAQAAJ (1. Halbband) および http://www.archive.org/details/p2ottokarsosterr05otto (2. Halbband) の電子版によって閲覧した（最終閲覧日 2012 年 1 月 19 日）。

58）見出しは „belîben *stv.*“ である。

59）‘Frauendienst’ の写本についての情報は http://handschriftencensus.de/werke/386 を（最終閲覧日 2012 年 1 月 27 日），また同作の，作中の抒情

いずれも，刊本の Apparat に異文の記載はない。

die vart / die reise belîben という語法における対格がどのように説明されるにせよ，‘Gregorius’ 第 835 行は，これらと同種の表現であると見做して差し支えないのではないだろうか。そして興味深いことには，Karl Lachmann の手に成る 1838 年の刊本をはじめ初期の ‘Gregorius’ 校訂版の本文では，問題の箇所の vart には sîner ではなく，変化語尾を欠いた sîn が先行している[60]。これは以下に見るとおり写本 E（オーストリア方言，15 世紀末[61]）の異文で，sîn vart は主格と並んで対格とも解することができる語形である[62]。今日認められている sîner に変えられたのは，Konrad

---

詩のテクストを含む伝存状況についての次の論考を参照されたい：Jürgen Wolf, Ulrich von Liechtenstein im Buch, in: Ulrich von Liechtenstein, Leben – Zeit – Werk – Forschung, herausgegeben von Sandra Linden und Christopher Young, Berlin / New York 2010, S. 487–514, hier S. 487–502. 両断片は Bechstein 編 ‘Frauendienst’ のそれぞれ 560,5–574,4 (Franz Schmidt, Augsburger Fragment des Frauendienstes, in: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 69 [1932], S. 321f.) および 849,3–850,2; 852,8–853,7; 889,4–890,3; 893,2–894,1; 896,8–897,8; 900,6–901,5 (Burghart Wachinger, Mittelhochdeutsche Bruchstücke aus Landshut, in: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 101 [1972], S. 326–340, hier S. 327–329) に対応する。

60）第 835 行（1882 年刊の ATB 版 Paul 編初版より前に刊行された版では第 663 行）の本文に sîn　vart が採られている版は次のとおり（引用符内は対応する異文の記載）：Gregorius, eine Erzählung von Hartmann von Aue, herausgegeben von Karl Lachmann, Berlin 1838, „siner vart *A*“ (K. Lachmann, Lesarten zu Hartmanns Gregorius, in: Zeitschrift für deutsches Alterthum 5 [1845], S. 32–69, hier S. 40); Bech 編第 1–3 版 ; Gregorius von Hartmann von Aue, herausgegeben von Hermann Paul, Halle a. S. 1873, „siner *A* (*vielleicht* sîniu)“（1876 年の ‘Nachtrag’ 付きの刊本でも同じであることを，次の電子版で確認した［2012 年 1 月 26 日］：http://books.google.co.jp/ebooks?id=0SkbAAAAMAAJ&hl=ja）；ATB 版 Paul 編初版。

61）写本 E についての記述は Paul / Wachinger 編第 15 版，S. IXf. に拠る。

62）‘Mhd. Grammatik’, S. 216, § M 43 の所有代名詞の変化語尾についての

Zwieržina の 1893 年の提案[63] を受けて本文に一連の修正が施された 1900 年刊の ATB 版 Paul 編第 2 版[64] においてであり，その異文一覧の対応する箇所には „sîner *AJK* = sîn *E*“（S. XIV）と記されている。A（13 世紀第 2 四半期，アレマン方言の原本が推定される上部ドイツ語東部方言[65]）は ‘Gregorius’ 本文校訂において最も大きな信頼を寄せられてきた写本であり[66]，すでに知られていたその異文 sîner に[67]，写本 J（15 世紀，アレマ

次の説明を参照されたい：„Im Nom. Sg. aller Genera, im Akk. Sg. Neutr. und (bes. bair. und spätmhd. zunehmend) oft auch im Akk. Sg. Fem. steht die endungslose Form.“ Erich Gierach, ‘Wörterbuch zu den Werken Hartmanns von Aue’（タイプ原稿，これについては Roy A. Boggs / Kurt Gärtner, Das Hartmann von Aue-Portal, eine Internet-Plattform als Forschungsinstrument, in: Zeitschrift für deutsches Altertum und deutsche Literatur 134 [2005], S. 134–137 の S. 135 および同所 Anm. 5 を参照されたい）では見出し語 „belîben“ の下，„1. ohne Zusatz“, „c) ‘unterbleiben’“ に „und muose belîben sîn vart G 835“ を挙げている。これに従えば，sîn vart は belîben ‘unterbleiben’ の主語として主格であると解されよう（ただし同辞書の見出し語 „vart“ の下では，同じ用例の引用が „nu .. muose (er) belîben sîner vart G 835R (B. sîn vart)“ となっている。„R“ は当該の語が韻［Reim］を踏んでいることを示す。„B.“ はおそらく Bech すなわち ‘Deutsche Classiker des Mittelalters’ 版の意）。Paul 編の 1873 年の刊本でも，vart が主格であることが示唆されている（sîniu vart）。sîn vart を採用した Lachmann, Bech, Paul は，一様にこれを belîben ‘unterbleiben’ の主語と見做していたのだろうか？ Bech が当該箇所に註釈を付していないのは，sîn vart をそのように解して，belîben の用法に特段の問題を認めなかったからか？

63）Konrad Zwieržina, Überlieferung und Kritik von Hartmanns Gregorius, in: Zeitschrift für deutsches Alterthum und deutsche Litteratur 37 (1893), S. 129–217 und 356–416, ‘Textbesserungen’ (S. 411–416), S. 412: „663 *s î n e r v a r t*“.

64）ATB 版 Paul 編第 2 版，S. Xf. を参照されたい。

65）写本 A についての記述は Paul / Wachinger 編第 15 版，S. VII に拠る。

66）たとえば Paul / Wachinger 編第 15 版，S. XX を参照されたい。

67）註 60 を参照されたい。

ン方言[68]）と K（15 世紀前半，アレマン方言[69]）の異文が一致していることが示されたのである[70]。ATB 版の当該の異文記載は，写本 B（おそらく 14 世紀，中部ドイツ語色を帯びた西アレマン方言[71]）の異文を加えた Paul 編第 3 版（1906 年）で[72] „sîner *ABJK* = sîn *E*“（S. XIV）に改められ，同第 4 版（1910 年，S. XV），同第 5 版（1919 年，S. XV）では第 3 版と変わらないが，Paul / Leitzmann 編第 6 版（1929 年）でさらに断片 L（13 世紀後半，東アレマン方言[73]）の異文が補足されて „sîner *ABJK* = sîn *E*（sine *L*）“（S. XIX）になり[74]，これが Paul / Wolff 編第 12 版

68）写本 J についての記述は Paul / Wachinger 編第 15 版，S. XI に拠る。

69）写本 K についての記述は Paul / Wachinger 編第 15 版，S. XII に拠る。

70）J のテクストの復刻である B. Hidber, Eine neue Handschrift von Hartmanns Gregorius, in: Beiträge zur Geschichte der deutschen Sprache und Literatur 3 (1876), S. 90–133 では（S. 99），第 663–664 行（註 60 を参照）は Vnd můst beliben siner vart / Die er durch got jn ain wart. これを受けて Paul は，同じ Beiträge 誌第 3 巻（S. 133–139: H. Paul, Zur Kritik des Gregorius, S. 139: „juni 1876“）ではまだ，„da A und I auch entschieden falsche lesarten mit einander gemein haben“（S. 135）と述べるにあたって，„663 *siner* = *sîn* E“（S. 135）をこの主張の拠りどころのひとつに挙げている。なお，ここで „I“ とした（S. 134）写本の呼称を Paul は，註 60 に挙げた校訂版の ‘Nachtrag’（S. 9: „*October 1876*“）で „J“ に改めている（S. 1）。K は Zwieržina 1893 が Paul 編 1873 年版との照合リスト（S. 131–147）で „663. *siner*“（S. 134）を記している。

71）写本 B についての記述は Paul / Wachinger 編第 15 版，S. VIIf. に拠る。

72）ATB 版 Paul 編第 3 版，S. XI を参照されたい。

73）断片 L についての記述は Paul / Wachinger 編第 15 版，S. XIIIf. に拠る。

74）Paul / Leitzmann 編第 6 版，S. XV によれば，Leitzmann による L の異文の補足は，次の論考の 1921 年刊のオリジナルに収録された復刻テクストに依拠している：Joachim Kirchner, Die Berliner Gregoriusfragmente, in: Joachim Kirchner, Ausgewählte Aufsätze aus Paläographie, Handschriftenkunde, Zeitschriftenwesen und Geistesgeschichte, zum 80. Geburtstag des Verfassers am 22. August 1970 herausgegeben vom Verlag Anton Hiersemann, Stuttgart 1970, S. 45–64. これによれば（S. 53）第 835

（1973 年，S. XXVII）になお記されている[75]。L では，vart は対格であると言ってよいだろう。なお，Paul / Wachinger 編第 13 版以来の異文の Apparat には，本文が写本 A および前記第 5 版ならびに第 12 版の文言に従っているかぎり異文を採録しないという方針に基づいて[76]，第 835 行の異文は記載されていない[77]。

‘Gregorius’ 第 835 行の写本 E と断片 L における異文が ATB 版の旧版に記されてきたとおりであるとして，それらは，‘Frauendienst’（1255 年，南部バイエルン方言[78]）と ‘Die österreichische Reimchronik’（1301–1319 年，中部バイエルン方言）において例証されているより前，すでに ‘Gregorius’（12 世紀末，アレマン方言）において動詞 belîben と共に名詞 vart が属格ではなく対格で，あるいは属格だけではなく対格ででも用いられていた可能性を示唆するものかもしれない[79]。いずれにしろ，第

行の L のテクストは Unde muoste beliben sine vart.

75）第 7–11 版のうちでは Paul / Wolff 編第 10 版（1963 年，S. XXIV）と同第 11 版（1966 年，S. XXV）を閲覧した。

76）Paul / Wachinger 編第 15 版，S. XXII–XXV，特に S. XXIII, 1 と 2 に拠る。先行する同第 13 版および同第 14 版の当該記述も参照した。

77）Mertens 編・対訳版の写本 A に依拠した（S. 796: „Die vorliegende Ausgabe benutzt A als Leithandschrift, [...]“）校訂本文に付された異文一覧（S. 802–826）にも，第 835 行の異文の記載はない。

78）以下を含め各作品の成立時期と地域の表示は次に拠っている：Mittelhochdeutsche Wörterbücher im Verbund, herausgegeben von Thomas Burch, Johannes Fournier und Kurt Gärtner, CD-ROM und Begleitbuch, Stuttgart 2002.

79）あるいは sîner vart を先行詞とする関係文である第 836 行 der er durch got enein wart の関係代名詞 der は属格と解されるから（BMZ, Band 1, S. 417b42–49 を参照されたい），sîner vart は本来の対格が Attraktion により属格となったものであろうか？ もっとも，‘Mhd. Grammatik’ における Attraktion の記述（S. 409, § S 167）では，den schaz den in ir vater lie, der wart mit ir geteilet（‘Gregorius’ 第 635–636 行，‘Mhd. Grammatik’ の当該箇所にあるとおり引用）など 7 用例が挙げられた後，次の説明が補わ

835 行の vart を対格として示す異文の存在は，同じ行の belîben が ‘unterlassen’ の意味で用いられているとする解釈の有力な拠りどころであると言えるのではないか。さしあたり，Paul / Wachinger 編第 15 版の註釈は „*m. Gen. ‘dableiben von’*“ の方が適切であり，先に挙げた訳文の中では，Kippenberg 訳の „unterbrechen“，Pretzel 訳の „aufgeben“ および中島訳の「中断せねば」に当該の belîben の意味の忠実な再現が認められると結論付けておく[80)]。

れている：„In den im vorigen Absatz angeführten Beispielen wird die syntaktisch korrekte Kasusform meist durch anaphorische Wiederaufnahme des Bezugswortes (bzw. der gesamten Nominalphrase) nachträglich hergestellt.“ ここには „meist“ と記されているが，実際には全 7 例がこの説明のとおりの構文であり，そのかぎりで ‘Gregorius’ 第 835–836 行のタイプの Attraktion は例証されていない。註 70 に引用した写本 J の異文も参照されたい。なお，第 836 行 der の異文はその他には，写本 E が Den を示す（Lachmann 1845, S. 40 および Paul 編 1873 年版の Apparat に拠る）。

80) Pannier 訳の ‘unterlassen’（註 31 を参照されたい）が，底本の sîn vart（註 13 および 60）を対格と解した上での訳語なのか，あるいはこれを主格と認識しつつ（註 62）敢えて用いた訳語なのかは不明である。— この小論で扱った問題は，動詞 bleiben の用法の歴史的変遷の包括的な検討を踏まえた上で，より立ち入って論究する必要があろう。なお，MWB の belîben の項の末尾（Band 1, Sp. 562, Z. 13–15）には次が挙げられている：Dieter Rosenthal, Studien zu Syntax und Semantik des Verbs *bleiben* unter besonderer Berücksichtigung des Niederdeutschen und Niederländischen, Göteborg 1984 (Göteborger germanistische Forschungen 27). 同書の „Teil II. Die Zeit vor 1500“ (S. 77ff.) は，その過半が „Syntaktische und semantische Analyse von *bleiben* in drei Werken der Zeit 1150–1250 In der „Sächsischen Weltchronik“ (mnd.), Heinrich van Veldekes „Eneide“ (mnl.) und der „Kaiserchronik“ eines Regensburger Geistlichen (mhd.)“ (S. 85ff.) に割かれている。ちなみにその中で „[...], während mhd. *er belibe des slages* nicht bedeutet, daß jemand einen Schlaganfall bekam, sondern daß er daran starb.“ (S. 102) とあるのは，筆者には先に言及した ‘Erec’ 第 854 行のことを言っているとしか思えないのだが。Rosenthal の文献リストに ‘Erec’ は見当たらないものの，BMZ と ‘Dt. Wörterbuch’ は挙げられている。

IV.

ここまで，‘Gregorius’ 第 835 行の belîben sîner vart の解釈をめぐる問題を指摘した ATB 版 Paul / Wachinger 編第 15 版の註釈を受けて，当該箇所について現行の翻訳を鵜呑みにせず，いささか立ち入った検討を行なうことを試みた。ここに紹介した検討作業は，日本における中高ドイツ語の入門授業の枠組みを超越あるいは逸脱して，専門に偏している側面もあるだろう。しかし同時にまた，複数の異なった刊本を参照し，中世ドイツ文献学のスタンダードワークを活用すれば，いかに本文の理解を深める端緒が開けるかも例示することができたように思う[81)]。このようにして中高ドイツ語原典テクストと取り組むことを，ゲルマニスティク専攻であっても必ずしも中世ドイツ語学・文学が専門ではない学習者の喫緊の課題とはしないまでも，少なくとも本来そうあるべき講読の方法として実際に即して紹介することに，対面形式の講読授業の意義の一端が認められるのではないか。そして，初学者には無縁と思われがちだった大部の辞書ととりわけ日本国内では現物を手許に置くことが困難な古い文献資料の多くが電子化されて，以前と比べはるかに手軽に利用・参照できるようになっている今日，演習授業は学習者がこの可能性を駆使して，19 世紀以来蓄積され今なおその価値を失わない中世ドイツ文献学の知見を活用する糸口をつかむ手助けをする場となりうるであろう[82)]。

81）武市修「日本人が古いドイツ語を研究する意味」（京都ドイツ語学研究会 „Sprachwissenschaft Kyoto“ 第 6 号［2007 年］，51–53 頁）をあわせて参照されたい。

82）CD-ROM ‘Mhd. Wörterbücher im Verbund’ には，BMZ と ‘Mhd. Handwörterbuch’ および両辞書を補足する Kurt Gärtner / Christoph Gerhardt / Jürgen Jaehrling / Ralf Plate / Walter Röll / Erika Timm / Gerhard Hanrieder (Datenverarbeitung), Findebuch zum mittelhochdeutschen Wortschatz, mit einem rückläufigen Index, Stuttgart 1992 と ‘Quellenverzeichnis zu den mhd. Wörterbüchern’ が収録されている。この

CD-ROM 版刊行より前の次のコメントも参照されたい（Plate 2000, S. 182）：„Diese vier Werke – BMZ, HWb., E. NELLMANNS Quellenverzeichnis und das Findebuch – sind als Wörterbuchverbund seit kurzem auch im Internet kostenlos jedermann für elektronische Nutzung zugänglich [...], für eine Benutzungsweise also, die sich besonders unter den heute Studierenden hoher Attraktivität erfreut und sprunghaft wachsenden Zuspruch findet.“ この中高ドイツ語の „Wörterbuchverbund“, MWB およびこの小論では CD-ROM ‘Der Digitale Grimm’ を利用した ‘Dt. Wörterbuch’ は現在，いずれもオンライン版が次のサイトから利用できる：http://woerterbuchnetz.de/（最終閲覧日 2012 年 1 月 29 日）。この小論を執筆するために各種テクスト刊本の電子版を利用することができたのは，慶應義塾大学日吉メディアセンターのご教示に負うところが大きい。